第19039号　（月刊）　（第三種郵便物認可）

まだある『レイプ・オブ・ナンキン』の改竄

南京事件研究家　松尾　一郎

アイリス・チャン

昨年米国で発売された『ザ・レイプ・オブ・ナンキン』（中国系アメリカ人女性レポーター、アイリス・チャン女史著書）は数十万部を売上げ、一躍ベストセラーとなった。現在でもこの本は売れ続け、インターネット上で書籍を通信販売を行う米国のアマゾン・コム・ネットを覗いてみると、以前は定価二十五ドルに対しての売値が二十二ドル一二十四ドルだったが現在十ルドルで販売されている。

著者は年齢が出版当時二十九歳（現在は三十歳）と若く、流暢な文章と弁舌で一躍ニュースや講演で引っ張りダコとなった。現在、うようにと特に注文を付け米国東海岸を中心に同書を図書館に置くよう呼びかけ実際に運動をしながら、講演を続けている。もっぱら米国人に反日感情を煽り立て、あまっさえ著書を図書館の所蔵リストに入れさせ、米国民が半永久的に日本に対して憎悪させることが目的らしい。

その『レイプ・オブ・ナンキン』が日本で十二月、柏書房から発売される。同書が日本で発売されることが決まった際、アイリス・チャンは、翻訳を正確に行なう事に注意を付け、余りにも史実と違いが多過ぎたため、十一月の出版予定が十二月に延期となった。

同書が描く史実の不正確さについては、日米両国で指摘されている。米国では「サンフランシスコ・クロニクル」紙のチャールズ・パレス記者、スタンフォード大学のケネディ教授等がこの本の記述を批判し、日本では、諸君！四月号で、日本大学教授の秦郁彦氏が指摘。

九月二十六日に行われた自由主義史観研究会主催「アイリス・チャン反論集会」では、東中野修道亜細亜大学教授が、アイリス・チャン著書の九十箇所の間違いを具体的に指摘した。東中野教授は、同書二十一頁にある記述「江戸時代の二百五十年間、日本の軍事力は弓と刀を超えることが出来なかった」等、小学生ですら知っているような間違いを堂々と述べており、作者の知性をを疑いたくなる記述が数多くある、と述べた。

国内でも、同書に対して反論の姿勢が見え始めている。こんな出鱈目な記述の本が現在米国でベストセラーとなり、今も売れ続けていることを考えると背筋が寒くなる。さらに、この本の中で最も悪質なのが掲載写真である。写真の〝インチキ〟と言うのは全くもって始末に負えないもので、普通、写真に関して疑問を抱く人はいない。同書の中でも、二十四頁に亘って、いかにも証拠写真のごとく紹介されている。だが、秦教授に慰安婦強制連行の写真を批判されるなど、掲載写真の信憑性に疑問が出ている。

これらの写真について最近、特に積極的に発言しているのが自由主義史観研究会の藤岡信勝東京大学教授である。同書五頁に、写真いっぱいに多くの人たちを日本軍野戦憲兵が取り調べている写真があある。キャプションには「一九三七年十二月十六日。支那民間人の大群衆を取り調べる十七人の日本軍憲兵。これらの支那人は市内での大量殺害に恐怖し、検査に抵抗しようとする者はいなかった」とある。いかにも無辜の一般市民を日本軍が恐怖に陥れる様子が窺えるが、この写真は毎日新聞社発行の『一億人の昭和史』（十）不許可写真史八十五頁に掲載されている。そのキャプションは「十二年十二月十六日、南京城内中山路にて撮影した特派員は『避難民にまぎれ逃亡をくわだてた約五一六千人の正規兵』と説明を付けてきた」とある。撮影者は判明しており、当時の東京日日新聞記者、佐藤振壽氏である。

南京戦当時、国民党軍は青年男子であれば即座に連行し兵士とした。つまり、南京城内の青年男子は殆どが兵士となって戦った。しかし、敗北が決定的となると、戦闘服を脱ぎ捨て平服に着替え、難民区へ逃げ込んだ。これは明白な国際法違反であり、死刑またはそれに相当する重罪である。つまりアイリス・チャン著書に書かれているような「一般市民」ではなく、国際法に違反した「正規軍兵士」。また「それを選別しようとしている日本軍の姿」と言うのが正しい。この写真は偕行社「南京戦史」南京戦史資料集」にも佐藤氏撮影写真として掲載されている。

これは明らかにキャプションの改竄である。

アイリス・チャン著『レイプ・オブ・ナンキン』に掲載された所謂「平民・便衣兵分離」の写真説明（写真上）は、『一億の昭和史』『南京戦史』のキャプション（写真下）を改竄して記述したものと判明

電脳日本の歴史研究会
http://www.nihsty.gr.jp
参照用